

第 58 回 「朝鮮半島の危機を読み解く― 朝鮮半島への思い」

朝鮮半島をめぐる、また局面が大きく転換しました。5 月 10 日の韓国大統領選挙の結果、9 年ぶりと言われますが、革新系の最大野党「共に民主党」の文在寅候補が圧勝したからです。今年に入り、米・トランプ政権が誕生した。北朝鮮による核実験やミサイル発射に対し、オバマ「口先大統領の不作為」や中国の「緩衝国家」の利用によって、「核大国の一步手前まで」進んだとして、「単独制裁」「単独攻撃」を宣告しました。さらに、中国の習近平主席との米中首脳会談の真っ最中に、シリアへのミサイル攻撃を執行して、中国に圧力をかける。それに加えて、米原子力空母カール・ビンソンの日本海への派遣をすすめて、それに日本の海上自衛隊が「安保関連法」にもとづいて共同訓練に参加した、いよいよ「第 2 次朝鮮戦争」の勃発が懸念される危機が一挙に高まりました。

朝鮮半島を南北に分ける休戦協定の北緯 38 度線、それは仙台市の少し南です。それを本欄に書いていたら、わが老人ホームの住人で仙台の南、白石市出身の同居者が「われわれ白石は 38 度線の南でアメリカ、北の仙台はソ連の占領に分断される」、そんな話を思い出しながら、朝鮮半島の危機を深刻に見守っていました。今回の朝鮮半島の危機は、トランプや習近平、そしてプーチンの問題以前に、何よりもまず朝鮮半島の住民とともに、我々の問題でもある。それだけに韓国の選挙民とともに、新たに選出された文在寅大統領に危機の解決を期待せざるを得ない。また、新大統領の責任もまた危機を解決し、分断された民族の悲劇をどこまで解決できるか、にあることは言うまでもないでしょう。

今回の韓国大統領選挙、いうまでもなく収賄罪などで起訴された朴前大統領の罷免に伴うもので、今年に入り 3 月 10 日に憲法裁判所が朴大統領の罷免決定、31 日の大統領逮捕によって突然の前倒し選挙になった。それだけにトランプ対北朝鮮、さらに中国との対立による朝鮮半島の危機が、大統領選挙の中心的な争点とは必ずしもなっていない。そのために「内向きな選挙」であり、「東アジアの安全保障への視点が抜け落ちている」といった外部からの批判もあります。しかし、それは外部からの批判に過ぎないのであって、38 度線を抱え込んだ朝鮮半島の住民にとって、半島の危機は片時も忘れることのできない問題だし、特に今回のトランプの北朝鮮に対しての単独軍事制裁による危機感は、我々 38 度線上の仙台市民よりも一層深刻だったはずです。選挙結果にも、それは当然に反映されての文候補の圧勝です。

文大統領は、前の革新政権である故盧武鉉大統領の秘書室長として、北朝鮮との経済協力事業を進めた実績もあり、融和政策に転換をするでしょう。すでに大統領の就任演説で、ワシントン、北京などととも、「条件が整うなら平壤にも出かける」と述べたそうですから、この間の経過からみて、ここで韓国の対北朝鮮政策は一挙に転換の可能性が大きいと思います。トランプ大統領も、

北朝鮮の金正恩と条件次第では会見しても良い、と述べたそうですから、その可能性もゼロではない。また、非公式ながら北欧ノルウェーのオスロで、北朝鮮の北米局長と米国の元政府高官らが接触を始めた、という報道もある。トランプ大統領も、一方でシリアのミサイル攻撃で限定空爆など、「単独制裁」をちらつかせながら、他方では中国とともに「核実験の強行」にハードルを引き上げながら政治的対応を進めているように見えます。こうした硬軟両面の作戦も、韓国大統領選の結果を予想しながらの巧妙な戦術だったのではないかと？

北朝鮮は相変わらず「核実験やミサイル発射」の強硬発言を続けています。しかし、トランプ政権の「単独行動」「単独制裁」の強行が具体化し、「斬首作戦」や「限定空爆」も準備されることになれば、政治的対応の必要性も高まらざるを得ない。すでに書きましたが、そして多くの報道に隠れて表に出ませんでしたが、4月11日開催の北朝鮮の「最高人民会議」では、20年近くも廃止され行われなかった「外交委員会」の選挙が行われている。党のトップクラスが選出され、軍事路線だけでなく、外交・政治路線も準備しつつ、しかし表面的には派手な軍事パレードが行われている。だから北朝鮮もそれなりに、「先軍政治」からの転換を図りながら、政治・外交路線の強化を進めている点に注目しなければならないと思います。

ここで局面の大転換がはかれるとすれば、すでに整理してきたように、1953年の朝鮮戦争の休戦協定の原点にさかのぼって、危機打開の道が拓かれなければならないと思います。休戦協定の当事者は、戦闘行為を進めた南朝鮮「韓国」と連合軍の「米軍」であり、対するは「北朝鮮」です。この当事者が、まずは政治的に休戦協定から平和条約締結に進むこと、そして国交正常化をはかる。そのうえで朝鮮半島の非核化と政治的統一への道を切り拓くために、6者協議などの関係各国との協力が必要でしょう。そうした原点からの筋道を踏むことなく、「戦略的忍耐路線」で「口先大統領の不作為」を続け、中国もまた「緩衝国家」として北を支援してきたことの大きな付けが、今日の深刻な危機を招いたことは否定できないでしょう。朝鮮戦争と冷戦構造が、38度線の休戦ラインと南北朝鮮の分断国家を、北東アジアに半世紀以上も残したまま、朝鮮民族の悲劇が放置されてきたことの責任は大きいし、深刻な反省が迫られているのです。そこには、日本の拉致問題も当然に含まれていることを忘れてはなりません。

38度線上に近い仙台市です。仙台には、戦前から中国と朝鮮からの住民が沢山いる。韓国の領事館もある。さらに、学都・仙台ですが、東北大学の留学生や外国人教師を見ても、中国に次いで韓国からの比率が圧倒的に高い。こうした特徴が、同じ日本でも欧米留学生の多い東京大学や京都大学と、仙台の東北大学との地域的な大きな違いです。留学生教育にとって、教師と学生の信頼関係がいかに大切なことか、それは中国からの留学生だった「魯迅」と東北医学専門学校（現在の東北大学・医学部）の教師だった「藤野先生」との師弟関係からも明らかです。とくに戦争が留学生教育に影を落とす。日清戦争時の幻灯を見たことが、魯迅の医学から文学への転進を決定づけたことは、太宰治の『惜別』にも紹介されています。

限られてはいますが、自分の留学生教育の体験からも、第2次大戦の侵略戦争や日本の植民地支配のことを、留学生たちは忘れてはいない。それだけに、彼ら、また彼女らと戦争を超えた人間的信頼関係を築くことが、どれだけ大切なことか？韓国から来た留学生の家族の面倒を見て、

最後に我々に残した言葉を忘れません。「朝鮮の母親が自分に＜日本人は決して信用してはいけない＞と言い聞かせて仙台に来た。しかし、仙台でお世話になり、＜先生たちは違います。これからも宜しく＞」義理堅い韓国の留学生たちです。